おはようございます。
ようこそ礼拝にお越しくださいました。
今朝は、２０００年前に聖霊が降臨されたことを記念するペンテコステ礼拝です。
ともに、その恵みに与りたいと願います。
前奏がありますので、静かに心を静め、礼拝を待ち望みましょう。

聖歌隊の特別賛美があります。
「ババイエットゥ」、２０００年前主イエス様の弟子たちに聖霊が臨んで下さった時、様々な言語で福音を語り始めたことを思い、ケニア・スワヒリ語の主の祈りを聖歌隊が賛美いたします。
歌詞が週報に挟まれていますので、口ずさめる方は、口ずさんでみて下さい。
どうぞお聞きください。

「息を吹き返し、観が変わる」

使徒の働き１：３－９

May.19.2024

使徒の働き１：３－９（パワポ）

Preface

主イエス様は、私たちを救うためにインマヌエルされました。
「神が私たちとともにおられる」というインマヌエルを、その誕生を通して体現して下さいました。
ではイエス様は、この地上に何年間おられたでしょうか？
３３年間です。
３３年間の地上の歩みを終えて、天の御国へと昇って行かれましたが、イエス様が神の国へと行かれる時が近づいた時、イエス様が一つ約束を下さいました。
ヨハネの福音書１４章です。

ヨハネの福音書１４：１６－１７（パワポ）

イエス様はこの地を離れますが、「また違う助け主、聖霊様をお与え下さる」と約束して下さいました。
そして、その聖霊様が、私たちにして下さること。

ヨハネの福音書１４：２６（パワポ）

神の言葉を、イエス様の言葉を、聖書の言葉を「ああ、分かった！」と、「合点だ！」として下さるのが聖霊なる神様です。
神の言葉が私たちの内で活き活きと生きているならば、それは聖霊の御業であり、神の言葉無くして聖霊のご臨在もなく、他の聖書箇所では「神の言葉そのものが聖霊である」とまで、イエス様仰います。
後ほど、その聖書箇所を見てみたいと思います。

Part One

私たちキリスト教は、三位一体の神さまを信じています。
天地万物の造り主であられる主なる父なる神様、御子イエス様、そして聖霊なる神様の三位一体なる神様です。
キリスト教はよく、ユダヤ教やイスラム教に並んで一神教に分類されたりしますが、キリスト教は、正確に言いますと一神教ではありません。
三位一体教です。
もちろん、多神教ではありません。

「三位一体の改革！」なんていう風に叫ばれながら、政治の世界で三位一体という言葉が用いられたこともありましたが、それは、三位一体という言葉の本来の使い方ではありません。
三位一体というのは、キリスト者が信じる聖書が教える三位一体の神にのみ使える表現であり、元々そのために考え出された言葉です。
でも不思議なことに、人によって考え出された編み出された言葉であるにもかかわらず、その言葉の内容を私たち人間が正確に的確に理解することが出来ないものでもあります。

三位一体とは、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神というお三方の神がそれぞれ存在しておられるにもかかわらずお一方であると、エペソ書で「神はただおひとりです」と言っている通り、論理的に説明不可能な、私たち人間が持ち合わせている論理では説明不可能な、神のご存在そのものについて無理矢理説明している言葉なんです。
一つは一つ、三つは三つです。
一つであると同時に三つであり、三つであると同時に一つであるというのは論理的におかしな話ですし、説明不可能です。
つまり、三位一体の神さまは、私たち人間の説明を必要としないお方であり、説明を求められる方でもなければ、到底人間が説明出来るようなお方ではないいということです。

それでも三位一体の神さまを何とか説明しようと考えだされたのが、例えば、私という人は牧師であると同時に、父であり、夫でもあるという役割の違いがありますが、そのようなものだとか、H_2O のように水、水蒸気、氷、液体、気体、固体という形を変えて存在するようなものだとか、光は、色んな違う色の

光線によって成り立っているけれども、三位一体もそういうものだという説明です。
　ですが、これらの説明を受け入れた瞬間、大昔から続く異端の教理を受け入れることになってしまいます。
　不思議なことに、三位一体を人が無理矢理説明しようとした瞬間、どっちかに偏ってしまい、到底説明の出来るものではありません。
　「ただ信じられるようにして頂いた」としか、告白出来ないのが事実だと思います。
　じゃいつ知るのか？
　天国に行った時ですね。
　天国に行けば、この地上の論理や時間や空間という限界には縛られておりませんので、「ああ、こういうことだったんですね」と、至って当たり前のように自然と理解することが出来るんだと思います。
　そして今朝は、その三位一体なる神様のうちの聖霊なる神様について考えたいと思っております。

Part Two

　私たち人間という存在にとって、聖霊なる神様は無くてはならないお方であり、最も重要なお方です。

　三位一体なる神様が初めて人をお造りになった時、大地のちりで人を形造られました。
　では、そのかたちとは、誰のかたちでしょうか？
　神のかたちです。
　私たち人間は、神に見た目が似ているということです。
　私たちはまだ、肉眼で神様を見たことがありませんので、今は神さまがどのようなお姿をされているのか具体的には分かりませんが、でも、私たちが神のかたちに造られたということは、神様は私たちに似ておられるということですね。
　なので、もし天国に行って神さまにお会いしたならば、「あ、あなたどなたでしょうか？」とは絶対にならないと思います。
　「ああ、僕の父ちゃんだ！」と、すぐに分かると思います。

　以前日曜日の礼拝に初めていらっしゃった方に、「洪先生、息子さんおられますよね？　駐車場から礼拝堂に来る途中、同じ顔をしている子を見ました」と言われたことがありますが、私たちが天の御国に行って、父なる神様にお会いした時、「ああ、僕の父ちゃんだ」と秒で分かると思います。
　初めてお会いした方ではなく、確かに見覚えがあり、何だかなじみ深いお姿をされていると思います。
　これが、大地のちりを用いて、神が人をご自分のかたちに創造されたということですね。

そして当然のように、ご自分に似た私たち子どもの姿を見て、喜ばれました。
ただし、人間にとって大事なのは、神と外見が似ているということではなく、神のいのちの息が吹き込まれたということが重要なことです。

創世記１：２７，２：７（パワポ）

人の存在・いのちの核は、その外見にあるのではなく、「神のいのちの息が吹き込まれた」ということにあります。
「いのちの息」と訳されているヘブル語「ニシュマットゥ・ハイム」という言葉は、旧約聖書の中で「神の霊」と訳される「ルアッハ」と訳される言葉と同義語です。
つまり、神の霊、聖霊が人のうちに入って初めて、人は人らしくなる、人本来の姿である、神のかたちに造られた存在としてのあるべき姿であるということです。
神の霊がその内にあって、人は人となるわけですね。

私たちに人間にとって大事なのは、外見が神様と似ているということではなく、神さまと心が似ていて、考えが似ていて、価値観が同じで、人生観が同じで、哲学が同じで、理念が同じだということです。
エデンの園で人にとって最も幸せだったのが何かと言いますと、神さまと言葉が通じたということです。
神さまと心が一緒で、考えが同じだったため、言葉が通じるのです。
言語が一緒だからといっても心が一緒ではないので、言葉が通じないということを私たち数限りなく経験しますが、エデンの園で人は、神と言葉が通じました。

私たちが神の言葉である聖書を読む時、分からない分かりにくいというのも、神さまと考えや心が同じではない罪人であるという目に見える証拠でもあるのかなあと思います。
神さまと思いが違う、思考が違う、願いが違う、見ているところが違うということの表われかなと思うのです。
でも、エデンの園で、人は神と同じ価値観を持っていました。
私たちの生きるこの世界では、「僕はこれで良いと思う！」、「いやいや、私はこれが良いと思う！」と言って分断が生じますが、エデンの園では、「神さま、私はこれがいいと思います」、「そうか、私もそれが大好きだ」と、すべてのことにおいて神様と趣向が同じで、心も合って、何を話しても話がぴったりと合ったということです。
そしてその理由が、「神の霊」、「神のいのちの息」が、人のうちにあったということです。

ローマ書８：９に、「キリストの霊を持たない者は、キリストのものではあ

りません」という言葉がありますが、ひいては、神の霊を持たない人は人ではない、本来あったはずの人の姿、佇まい、趣ではないとも言えます。

人は本来、大地のちり＋神の霊＝人　です。
言い換えますと、人－神の霊＝何になりますか？
大地のちり、土のちりです。
つまり、人から神の霊を取ってしまうと、何にもならないということです。
だから、伝道者の書でソロモンが、「ちりは元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。さもないと、空っぽで、空っぽで、空っぽだ。ああ空しい」と吐露するわけですね。
お金をどんなに持っていたとしても、物凄い成功を収めて、何かすごいことをしたとしても、神の霊がなければ、キリストの霊がなければ、それは人ではあれません。
ただの土くれになってしまいます。
私たち人間にとって最も大事なのは、神の霊ですね。

Part Three

では何で、罪が、恐ろしい程に深刻な問題なのでしょうか？

最初の人間アダムとエバが罪を犯した瞬間、神の霊がその内でぐしゃぐしゃになってしまいました。
神の霊が消滅、消え去ってしまいました。
他の霊が、人のうちに入り込んでしまったということです。
創世記３章を見ますと、蛇が、蛇に化けたサタンの霊が人のうちに入って来始めたことが分かります。
第一テサロニケ５：１９に、（御霊を消してはいけません。）

テサロニケ人への手紙第一５：１９（パワポ）

とありますが、罪は、人のうちにある神の霊を消し去ってしまいます。

ハーバード大学の神学部教授だった Harvey Cox という方が書いた「On not leaving it to the Snake」、日本語に訳しますと、「蛇のやりたいようにさせてはならない」、「蛇の言いたいように言わせておいてはならない」という本がありますが、正に私たち人間は、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者たちの言葉によっては生きられません。
死あるのみです。

私たち人間は、神の言葉によって、神の言葉通りに生きる存在です。
「主よ、お話し下さい。しもべは聞いております」、「人はパンだけで生きる

のではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」と聖書に書いてありますが、イエス様は、「神の言葉イエス様の言葉そのものが霊である、いのちであられる聖霊である」とまで仰います。

ヨハネの福音書６：６３（パワポ）

イエス様の言葉そのものが聖霊であり、またいのちです。
聖書の言葉を読まない、食べない、覚えない、反芻しない、考えない、悩まないということは、そのものずばり、聖霊がその人のうちにいないということにもなり、いのちもないということになります。
逆に言えば、神の言葉が、イエス様の言葉が神の霊であられるので、神の言葉に生きるならば、神の霊がその人のうちにあるということになります。

だから、神の言葉、神の霊を人のうちから絶やしてしまうために、蛇に化けたサタン・悪魔は自分たちの言葉をかけ、その言葉をもって人のうちに入っていきました。
「お前も神のようになりたいだろ？　なれるぞ！　素晴らしい世界が目の前に広がっているぞ！」という言葉をかけられても、その言葉に耳を傾けることもなく、相手にすることもなければ良かったのに、その言葉に魅了され、最初の人アダムとエバはあっさり受け入れてしまいました。
そして、善悪の知識の木の実を食べてしまいます。

サタンの言葉がその内に入り、サタンの霊に従い、神の言葉を神の霊を自ら消し去ってしまいました。
神の霊のない肉、土くれとなってしまったわけです。
そうして私たちの生きるこの世界は、霊的混乱を来たしてしまうことになりました。
「世の中、なんでこんなんなんだ？！」と思うことがありますが、私たち人間の霊が混乱して、他の言葉、他の霊、他の考え、他の人生観、他の価値観、他の世界観が入ってきてしまったためですね。

この「観」というのが、とても重要ですね。人生を分けます。
「沙漠で水のあるオアシスだと思って行ってみたら、蜃気楼だった」となると大変なことになります。
間違ったものを合っていると思いながら、見当違いを続けると死にます。
だから、「観」が重要になってくるわけです。
どんな人生観、どんな価値観、どんな世界観で、物事を見定めるのかが生死を分けます。

そして、人にとって究極的な「観」が、霊です。
神のいのちの息、神の霊です。

神の「観」をもって人生を生きるのか、世の価値観に支配されて生きて行くのか。
私たち人間は、しきりに世の価値観に支配される方へと引き寄せられて向かって行ってしまいます。
周りが皆そういう「観」で生きているせいか、クリスチャンもこんがらがって、まごついてしまいます。
霊的混乱に、混乱してしまった世界。
で、そんな世界を見て、一番もどかしく気の毒に思っておられる方が、神です。　三位一体の神です。

イザヤ書５５：２－３（パワポ）

何かやってそうで、何か得ていそうで、何も得ていない。
砂上の楼閣、見掛け倒し、絵空事、「なぜ、あなたがたは食べ物にもならないもののためにお金を払い、腹を満たさないもののために労するのか。わたしに聞くことが、わたしの言葉があなたを生かす！」
「わたしの言葉は霊であり、いのちです」、「あなたのみことばは、私の上あごになんと甘いことでしょう。密よりも私の口に甘いのです」というイエス様やダビデの言葉に賛同出来ないのは、「観」が間違っているからです。
つまり、「霊」が間違っているからです。
神の霊ではない、他の霊に支配されているからですね。
だから、オアシスを捜し当てることが出来ずに、蜃気楼に向かって行って沙漠で人生を終えてしまうように死んでいってしまうわけです。

「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることは出来ません」とイエス様仰いましたが、私たち人間は、イエス様の与えるいのちの水を飲み、神の霊によって生まれ変わらせて頂かなければオアシスに至ることが出来ません。
聖霊によって息を吹き返し、「観」が変わらなければ、神の国に入ることは出来ません。

生まれながらのそのままの私たち人間は、裏表ひっくり返ってしまっているので、それを正しい位置、本来あるべき姿、立ち位置、世界観に戻してあげる必要があり、戻すことこそが霊によって新しく生まれるということです。
信仰生活において、神の霊によって新しく生まれるということほど、重要なことはありません。
聖霊によって新しく生まれたという経験をさせて頂きますと、それまで息苦しかったところから、胸を大きく広げて、ふーっと息を吹き返すかのような霊的体験をします。
そして、決して無に帰することのない爽やかな生ける水を飲むかのような感覚をその霊に覚えることでしょう。

Part Four

今日の聖書箇所使徒の働き１章の内容を見ますと、弟子たちが、イエス様と３年間も寝食を共にして一緒に生きたにも関わらず、天に昇られる直前のイエス様に、全くもって神の霊とは合わない世の価値観に従った質問をします。

「私たちの国イスラエルが復興し、栄え、世界一の武力大国経済大国になるのはいつでしょうか？」

するとイエス様が、「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません」、つまり、「そのことは、全くもって重要なことではありませんよ。わたしはそのことのために、この地上に来たわけではないんだよ」と語り掛けられました。

弟子たちは３年間もイエス様と一緒にいたのに、イエス様とはピントが合っておらず、３年間もイエス様と一緒に過ごしたのには、他の理由、他の考えがありました。

イエス様がこの世の王として君臨され、この地上世界を支配なさるようになったら、その一番近くで、そこから得られる富と力と名誉を他の誰よりもお裾分けして頂きたくてついて行ったというわけです。

「それなのに、イエス様が十字架に架かられて死んでしまった。ああ、困った！」、「ところが幸いにも、イエス様が復活なさった。ああ、もうこれで安泰だ」と思った矢先、今度は天の御国に行ってしまうと言うのです。

大変なことになりました。

だから、弟子たちはあせってイエス様に、「いやいやイエス様、ちょっと待ってください。私たちを栄えさせてから、天国なり、天竺なり行って下さい」と詰め寄ったわけです。

イエス様が天の御国神の国へと昇られるその瞬間まで、弟子たちは全くもって、神の国とは違う見当違いなことを考え、見当違いな価値観、世界観、人生観で、その心が霊がいっぱいでした。

だからイエス様は、「それが重要なことではないんだよ」と話しかけられたわけです。

では、何と話しかけられたのか？

使徒の働き１：８（パワポ）

この言葉を述べられる前に、こんなことも仰いました。

ヨハネの福音書２０：２２（パワポ）

まるで、創世記２：７の新たな再現です。

全然ピントが合っていない弟子たちの息を吹き返させるために、神のいのち息を吹きかけて下さりながら、「今一度、新しく神の霊を受けなさい」と仰る

のです。
　蜃気楼のようなこの世の国々の回復にしか関心を寄せられなくなってしまっている見当違いな、「観」違いな弟子たちに、神の国という真理にピントが合うように、「エルサレムを離れることなく、聖霊を待ちなさい」と、イエス様この地上での最後のお願いをされました。

　そして本当に幸い感謝なことに、弟子たちは、そのイエス様のお願いを素直に受け入れ、エルサレムを離れることなく、約１週間、聖霊を待ち望みながら心を一つにして祈りました。
　エルサレムを離れないということは、彼らにとっては命がけのことです。
　イエス様が十字架に架けられてから約３００年間、クリスチャンたちは激しい迫害に会いました。
　獣に食い殺される者もいれば、海の水面に顔だけ出して、水中にある体を少しずつ魚に食われながら殺されていく者もおり、煮えたぎる油の中に入れられて殺されて行く者たちもいたり、また、クリスチャンになったら社会生活を営むための公民権まで剥奪されて、一般社会では暮らしていくことが出来ないので、カタコンベ・墓地を掘り下げていきその地下で暮らすようになり、その墓地の地下で生まれてから死んでいく者もいるほどでした。
　そんな厳しい迫害があっても、ローマ帝国下のクリスチャン人口は１０％、２０％、多い時には８０％にまで及んだということです。
　物凄いパワーですね。

　なぜそこまでして、世の国を捨ててまで、クリスチャンをやり、クリスチャンを生きるのでしょうか？
　神の国を知ってしまったからですね。
　聖霊が臨むと、息を吹き返し、「観」が変わるからです。
　神の視点が、神の考えが、神の思いが、神の価値観が、神の人生観が、神の世界観が与えられ、変えられるからです。

　弟子たちは聖霊が臨む前までも、イエス様と寝食を共にするほどのクリスチャンでありましたが、「私のもの、私のもの」と思いながら、世の中に欲を抱いて生きていました。
　ところが、聖霊を受け聖霊に満たされると、「有無相通」有るものと無いものをお互いに融通し合いながら、便宜を図るような生き方へと変わりました。
　サタンの考える世の回し方とは違います。
　持つ者はさらに持ち、持たない者はさらに持てないのではなく、神からの頂き物、神からの恵み、神が下さったものを互いに神から愛されている尊い存在として尊重し合いながら、生きたいと思えるばかりか、そう生きようと取り組むようになりました。
　すると、そこが神の国でした。
　そこに、その自分たちのいる正にそこに神の国が建て上げられたのです。

そしてその姿こそ、実のところ、この世に生きる私たち人間すべてが、本当は望んでいる姿ではないでしょうか。
使徒の働き２章の最後に書いてありますが、「みな一つになって、一つにして、一つにして」と、サタンの霊によって惑わされてしまっているこの世の分断が回復されている姿。
神の国は何も天国に行くことばかりでなく、この地においても聖霊の満たしによって成されるものですね。
「なんだろう、あの人たちは？　どのようにしたら、あんなふうに生きられるのだろうか？」と人々が好意を持ち、毎日救われる人々が加えられたと書いてあります。

Part Five

人は、水と聖霊によって新しく生まれなければ、神の国を見ることが出来ません。
そして、信仰生活において最も大事なことは、聖霊によって新しく生まれることです。
聖霊の満たしです。
では、聖霊を受けることは難しいことでしょうか？
簡単なことでしょうか？
簡単です。
なぜならば、神様が私たちに最も与えたいと思っておられるのが、聖霊だからです。

マタイの福音書７章を見ますと、「求めなさい、探しなさい、たたきなさい。そうすれば与えられます」というイエス様の約束がありますが、これがルカの福音書に行きますと、同じ内容に一つだけ違うことが付け加わっています。
それは、「求め、探し、たたく者に、天の父なる神様が聖霊を下さらないことがあるでしょうか！」という約束です。
要するにイエス様が仰りたいことは、「あなたがたは他のものは本当に良く求めますね。『お金下さい、合格させて下さい、病を癒して下さい、良い生活が出来るようにしてください』とは祈ることもまあいいでしょう。でもなぜ、誰一人として、『聖霊をお与え下さい』とは祈らないのですか？」というお気持ちですよね。
「聖霊をお与え下さい」と求めれば、父なる神様は必ずやお与え下さるということですね。

弟子たちも１週間祈りました。
たった１週間です。
聖霊を受けることは難しいことではありません。
神さまが与えたくてうずうずしておられることが、聖霊をお与えになることです。

聖霊を受けられないのは、私たちの関心が無いからですね。
良い生活とか、病が癒えるとか、合格とかには欲が出て来るのに、聖霊を与えられることには欲が出て来ない。
「まあ聖霊の満たしが与えられるならば無いよりはいいかもしれませんが、与えられなくてもそんなに不便なことはありません。それよりも、来月のお給料上げて頂けないでしょうか」というような気持ちの方が大きいというのが、正直なところでしょうか。
聖霊に対する渇望、聖霊に対する切実さが足りていないばかりか、あまり教え教えられて来なかったのかもしれません。

Conclusion

父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神様は、私たちの「聖霊をお与え下さい」という祈りを節に待ち望んでいて下さいます。
そして、もし求め与えられたならば、そこに神の国が成ることでしょう。
愛という聖霊の実がなることでしょう。
私の基準、私の学識、私の思い、私の価値観、私の感覚、私の趣向は二の次、神の思い、神の考え、神の価値観に生きたいと思えるだけでなく、生きさせて頂けることでしょう。

今私たちに足りないのは聖霊です。
聖霊によるバプテスマです。
聖霊の満たしです。
お祈りいたしましょう。

祝祷：イエスは彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」